

72 近世大坂の産科学と墮胎術

内野 花

関西大学大学院 文学研究科
博士課程後期課程 史学専攻

中世の戦乱を経て徳川幕府が開幕し、比較的安定した政権維持が可能となると、元禄期に代表される上方文学など、京都・大坂を中心とした文化・経済が花開いた。しかし、度重なる異常気象による農作物の不作や過多豊作により、三都などの都心部と地方農村部とは経済格差が広がっていった。新町や島原など都心部には有名な遊廓が形成され、その隆盛を極めていたが、地方農村部では働き手としての男児優遇の価値観から、貧困に喘ぐ地域では女の子は貧しさゆえに女衞を通して遊廓へ売買されていた。そのため、遊廓ではさまざまな地方から来た女性たちが勤めており、出身地方の言葉を使用させないための廓詞も存在した。

また、太夫や花魁と呼ばれる最上位の傾城は、あらゆる知性を兼ね備えた女性であり、遊廓を題材とした文学作品が執筆されたり、流行の最先端としてひとびとの耳目を集めたりと、文化形成の一端も担っていた。しかし、遊郭の女性たちは芸事だけでなく顧客との性交渉も担っていたため、妊娠することもあったであろう。妊娠すれば業務に差障るため、墮胎を余儀なくされ、産科医に墮胎薬を処方してもらったり、ドクダミやスイセン、ユリなど毒性のある植物の球根を使ってたりして墮胎していたという。

この遊廓発展の時系列とその発展の時系列を同じくするものがある。墮胎術で有名な中条流と回生術で一世を風靡した賀川流である。中条流は中条帯刀を創始者とする。帯刀は金槍科から産科に転じて名を成した医師で、難産の際の最終手段としての握り薬・腐り薬など墮胎薬の使用による処方を書いた。しかし、江戸中期頃より、墮胎目的での投薬が主となり、中条流は墮胎術の代名詞となっていた。一方、上方中心に隆盛を誇った賀川流は賀川玄悦を創始者とするもので、

墮胎を厳禁していた。難産の際、医療技術の未熟さゆえに母子ともに死亡することが多かったため、「大を救って小を殺す」の理念に則って胎児を娩出させることで母体を救助する回生術を考案した。回生術には、胎児の頭蓋骨に穿孔したのち鉄鉤を引っかけて牽引する穿顱術、頭蓋骨を砕いて小さくしてから牽引する碎頭術、胎児の身体を切り離してから牽引する截胎術がある。しかし、いずれも胎児を傷つけるため批判も多く、手で胎児を脚位に回転させてから牽引する無鉤回生術（双全術）がのちに賀川流の内外から考案された。古くは『医心方』に始まり、中医学を基礎とした日本の産科学は、江戸期に独自の理論技術で実践的外科術を發展させ、多種多様な産科専門書を編纂し、さまざまな産科習俗も生んだ。そのなかの一つ、子返しを挙げる。

都心部では、産科医や職業産婆が存在したため、産科に関する諸問題が発生した場合、診察治療を受けることができたが、地方農村部では不可能であった。都心部に比べて農村部での出産に関わる妊産婦子の死亡率が高かったであろうことは想像に難くない。また、

無事に出産できても経済的事由から養育できないことも多かったろう。その場合には、子返し、つまり間引きが行われていた。これは、七歳までは人間ではなく神様の子どもであるとする思想に由来するもので、神様にお返しする（子返し）という生命倫理観が広く浸透していたからに他ならない。この子返しの倫理観は墮胎にも影響していたのではないだろうか。

本発表では、江戸期を開幕より享保の改革までを前期、享保の改革から寛政の改革までを中期、寛政の改革から幕末までを後期という三つの時系列に分類し、それぞれの期間における産科学の特徴を述べるとともに、墮胎術の隆盛を招いた経済盛衰や生命倫理などに、産科学の背景にある社会文化に焦点を当てて、江戸期の産科学の一大流派である賀川流が發展した上方、なかでも大坂における産科学について考えてみたい。